

この時代に〈表現〉する

土田英生

コロナの感染拡大という、以前から考えればまるで虚構のような日常のせいで、フィクションに入り込みづらくなった。自らが作品を書く時にもその困難を感じるが、選考にも大きく影響したのではないかと思う。大賞、佳作を受賞された山本正典さんの『セミの空の空』とピンク地底人3号さんの『カンザキ』の二作は、現在の世界を忘れさせてくれる力があつた。正直に言えば『セミの空の空』に対しては解釈が全く追いつかず、私にとっては不明な点だらけだったのだが、それでも劇世界から覚めることなく最後まで入り込んで読まされた。生者と死者の境界線の緩やかさがとても心地よく、さらにはグロテスクなはずのエピソードも露悪的に感じさせない品の良さもあつた。どのように書いているのかが私には皆目見当もつかないが、唯一無二な世界を構築している山本正典さんには尊敬しかない。

ピンク地底人3号さんの作品はこれまで何作か読ませてもらっていて、毎回、その解像度の高さに驚かされている。場所の持つ匂いや、細部に現れるそこでの生活の価値観などが、まるでその場において記述したかのような正確さで描かれている。今回の『カンザキ』に関しては、現在と過去、その時間の行き来の効果はやや薄く感じられたのが残念な気はした。また、オープニングの入り方からもあって、私は、この物語を緑川の視点で読み進めていたが、途中から神崎純弥をはじめとする”カンザキ”に重心があるのだと気付かされた時に、なんだか少し肩透かしをくらったような気分させられた。

私が他に気になったのは小栗一紅さんの『愛しのクマちゃん〜くじらの日々〜』。この作品への評価は難しかった。ノンフィクションであろうが、作者の主観で描かれたそれは演劇作品には違いないが、読み手と大竹野正典さんとの関係の距離が、影響を与え過ぎるのではないかという懸念を持った。またキタモトマサヤさんの『空のトリカゴ- Birdcage In The Sky-』もとても好きな作品で、冒頭はとても素直に入り込めた。こうした作品の場合、作者の手つきが見えないことが重要だと思うが、もったいなかったのは伯父が出てきてから、明らかに作品を一方向に進めようという意図が透けてしまったことだと思う。

棚瀬美幸さんの『これ から の町』と植松厚太郎さんの『夕夕方暮れる』は試してみていることはどちらも面白いのだが、アイデアが昇華し切れていないもどかしさを感じた。棚瀬さんは言語の、植松さんは時間の前提を疑っているのは刺激的ではある。

橋本健司さんの『わたしは家族』は、出て来るエピソードには確かな手触りを感じられるものの、読んでいていつまでも焦点が合わない印象を受けた。

中村ケンシさんの『ステインド グラス』は、地震で休校になった学校という、演劇の時間に適した設定であつたのだが、過去に起きたことと現在の時間が重なってこず、ドラマがなかなか立ち上がらなかった。ただ、これまで中村さんの作品を読んだ時、説明的な台詞が多いと私は感じていたのだが、今回の作品は随分と台詞が登場人物の口から自然に出ていて、読みやすかつた。

横山拓也さんの『あつい胸騒ぎ』に対しては、読んですぐに「惜しい」という感情を持ったが、この惜しさの原因を言葉にするのはとても難しい。圧倒的な筆力で進むドラマは読んでいても心地いいのだが、どこかですっと「誤魔化されている」ような違和感を抱かされる。これはもしかしたら、作者が作品に向かう時の、その入り方に理由があるのかも知れないとすら思う。

冒頭にも書いたが、コロナによって創作された世界に対する厳しさは増したように思うし、この時代に表現することの困難を知つた。この環境下で作品を書き続ける劇作家に敬意を表したいと思う。最後になりましたが、受賞されたお二人、おめでとうございます。